

バーヴィヴェーカの円成実性批判

大 谷 光 義

1. はじめに

インド中期大乘仏教における中観派の思想家バーヴィヴェーカ (Bhāviveka, Bhavya, 清弁, ca. 490–570) は, MHK, PP, 及び Dzh において瑜伽行派を批判したことで知られているが, いずれの著作においても批判の中心は三性説に向けられたものである。その中でも依他起性批判が主要な位置を占めていることは, 依他起性を遍計所執性, 円成実性の基体とする三性説の基本構造から見て当然であろうが, 筆者は円成実性批判の重要性も見逃せないと考える。なぜなら, そこには瑜伽行派における勝義である円成実性が中観派の観点からどのようにとらえられるのか, すなわち中観派と瑜伽行派の勝義, 空性に関する思想の相違点が端的に示されていると考えられるからである。

本稿の目的は, MHK ch. 5 における円成実性批判を中心に, PP の記述とも比較参照しつつ, バーヴィヴェーカの瑜伽行派批判の意義を考察し, 彼自身の勝義観における問題点を抽出することにある。

2. MHK における円成実性批判と無分別知

2.1. 円成実性の無分別性と不可言説性に対する批判

まず円成実性批判の冒頭では, 「虚空」(ākāśa) による円成実性の無分別性の譬喩が批判される。

無分別の事物が虚空と等しい (ākāśasamatā) というのは正しくない。様々な想 (saṃjñā, 概念) による分別 (vikalpa) が空間 (avakāśa) を区分 (prabhedana) するからである。(k. 85)

瑜伽行派において「虚空」は, 清浄, 不変異, 一味・一相 (無分別) である円成実性の譬えとして用いられるが, 勝義とはそもそも認識の対象ではあり得ず, 従って虚空のように分別をもって区分することを容認するようなものに譬えられるべ

(120) バーヴィヴェーカの円成実性批判 (大 谷)

きではないという、バーヴィヴェーカの基本姿勢がここで示される。

さらに、円成実性は言語表現され得ない、との瑜伽行派の主張も批判される。

生じたものについて言語表現され得ないということ (anābhilāpyatva) はない。〔その〕否定が以前に示されたから、言語表現されないとしても、世俗 (saṃvṛti) において真実〔であると〕の混乱 (tattvavibhrama) がある。(k. 86)

中観派にとって、勝義が言語表現され得ないとは、勝義における所取・能取の無を示すことに尽きるのであり、瑜伽行派のように、所取・能取の無を認識対象とするなら、すなわち「無の有」を認めるなら、それは「生じたもの」、つまり縁起性のものであり、言語表現され得ないということはない、と言う。

円成実性批判の導入部分であるこれら2偈で示されているのは、一つは瑜伽行派が「無の有」とする認識対象としての勝義であり、いま一つはそれを認識する認識主体としての無分別知 (勝義における知) である。本段は円成実性の二つのあり方を提示した上で、それを批判するバーヴィヴェーカの立場を明らかにするものと考えられる。

2.2. 無分別知が認識対象をもつなら一刹那の智と矛盾すること

k. 87 以降では、瑜伽行派の無分別知が勝義たる円成実性を概念的に対象化してとらえるものであること、およびその無分別知が実在するとの主張が主として批判され、k. 93 では、瑜伽行派の主張に従えば自在者 (svayambhū, 如来) の智が一刹那をもつことに矛盾する点が、瑜伽行派の自己認識理論を批判することによって示される。

刀の刃 (asidhārā) のように、知が自分自身に生じることは不可能であるから、そして自己認識 (svasaṃvitti) は否定されるから、一切智者性 (sarvajñatā) は一時にはあり得ないであろう。(k. 93)

バーヴィヴェーカによれば、「無の有」を認識対象とする瑜伽行派の無分別知は、認識主体たる識が認識対象たる識 (形象) を認識し、さらに第3の識がその認識を認識するという、いわゆる自己認識 (svasaṃvedana, svasaṃvitti) における第3の識に等しい。前者の認識と後者の認識とが同時に生じることはないから、彼らの無分別知を認めるなら「如来の智は一時に一切所知を知る」ことは不成立である。

2.3. 無分別知とはどのようなものか？

円成実性批判の終盤で、無分別知についてのバーヴィヴェーカ自身の理解が述べられる。

それ(出世間の知 (lokottaramati))は無分別 (nirvikalpa), 無所縁 (nirālamba), また無相 (nirnimitta) である。それ(の知)によって, 自己と他者の法性 (svānya-dharmatā) について同時に, 覚知のないあり方で平等に覚知される (abodha-samatā-bodha) からである。(k. 102)

出世間の知は, 諸法が不生であり実体がないことを知ることによって一切の分別を離れており, 一切諸法を認識せず, 対象を〔因〕相 (nimitta) としてとらえないと言う。ここでは, 瑜伽行派が無の有を所縁とする知を無分別知とするのに対し, 無分別の知は所縁をもたないはずである, とのバーヴィヴェーカの従前からの主張が, 改めてまとめられていると考えられる。

3. 結語 (バーヴィヴェーカの円成実性批判における問題点)

以上, MHK におけるバーヴィヴェーカの円成実性批判の中心は, 実は瑜伽行派が勝義とする「無の有」というよりも, それを認識する無分別知にあることが確認できた。

ところで, 批判の矛先を向けられたこの無分別知を巡るバーヴィヴェーカ自身の立場については以下のような疑問が残る。

よく知られているように, 中観派の根本思想の一つである二諦説を示す MMK ch. 24, k. 8 に関する PP の註釈において, バーヴィヴェーカがその主張命題に用いる「勝義において」(paramārthataḥ, don dam par (na)) という限定づけにおける「勝義」(paramārtha, don dam pa) という複合語に対し, 3通りの解釈が与えられている。同様の記述は MHK の自註と言われる TJ における MHK ch. 3, k. 26 の註釈にも見られるが, 両著作とも, 第1の解釈は義(対象)でもあり勝れたものでもある (paramo'rthah) こと (karmadhāraya による解釈), 第2の解釈は勝れたものの義 (paramasya arthah), すなわち勝れた分別的思惟を超えた知 (nirvikalpajñāna, 無分別知) の義(対象)であること (tatpuruṣa による解釈) とする。第3の解釈には異同があり, PP は, ①それ (= 勝義) を対境とする無分別知 (bahuvrīhi による解釈 1), ②無生起等の説示, 及び聞思修から生じる般若 (bahuvrīhi による解釈 2) とし, 一方 TJ は, 勝義を理解することに随順する般若 (bahuvrīhi による解釈) とするが, ここで問題となるのは, 第1, 第2の解釈において, バーヴィヴェーカが知の対象としての勝義を積極的に認めている点である。前述の通り, PP ch. 25, 及び MHK ch. 5 において, 彼は瑜伽行派の無分別知は認識対象をもつがゆえに無分別ではあり得ないとし, そのような知の対象たる瑜伽行派の勝義, すなわち円成実性を批判している。そ

(122) バーヴィヴェーカの円成実性批判 (大 谷)

れにもかかわらず、ここではまさにその瑜伽行派と同じく勝義を無分別知の対象としているのである。

山口 [(1941) 1975] が指摘するように、MHK ch. 5 における瑜伽行派の「無の有」、及び無分別知に対する批判が、絶対否定の空性を標榜する中観派から、入無相方便道に示される修道論(方便唯識説)を思想の根幹に置く瑜伽行派に向けられたものであることは明らかであろう。しかし一方、PP ch. 24, TJ ch. 3 におけるバーヴィヴェーカの勝義理解が示すものは、まさに勝義に向かう修行の階梯であり、その重要性にほかならない。

この思想的矛盾は、中観派が独自の修道論を持たなかったがゆえに、修行を重視する瑜伽行派の思想を彼が PP ch. 24, TJ ch. 3 において意図的に取り入れたことに起因するのではないかと推測され得るが、この問題については、バーヴィヴェーカ以降の中観自立派、及びチベット仏教における勝義観の問題を含め、今後さらに検討を進めたいと考える。

〈略号表〉

MHK *Madhyamakahrdayakārikā*.

MMK *Mūlamadhyamakakārikā*.

PP *Prajñāpradīpa(-mūlamadhyamaka-vṛtti)*.

TJ *Tarkajvālā(-madhyamakahrdayavṛtti)*.

Dzh 『大乘掌珍論』(大正新脩大藏經 第 30 卷 中観部全・瑜伽部上)。

〈参考文献〉

Bahulkar, Shrikant S. 1994. "The *Madhyamaka-Hṛdaya-Kārikā* of Bhāviveka: A Photographic Reproduction of Prof. V. V. Gokhale's Copy." *Nagoya Studies in Indian Culture and Buddhism: Sambhāṣā* 15: i-iv, 1-49.

Lindtner, Christian. 2001. *Madhyamakahrdayam of Bhavya / Bhavyakṛtam*. The Adyar Library Series, vol. 123. Chennai: The Adyar Library and Research Centre.

斎藤明 2007 「『中観心論』 *Madhyamakahrdayakārikā* 及び『論理炎論』 *Tarkajvālā*, 第 5 章「瑜伽行派の真実 [説] の [批判的] 確定」(Yogācāratattvaviniścaya) 試訳」『大乘仏教の起源と実体に関する総合的研究——最新の研究成果を踏まえて——』(平成 19 年度科学研究費補助金(基盤研究(B)(2))研究成果報告書), 200-268.

山口益 (1941) 1975 『佛教における無と有との對論』山喜房佛書林, 1941. 再版 1975.

〈キーワード〉 円成実性, 無分別知, 虚空, 勝義

(駒澤大学大学院)